うまやの　そばの　なたね

うまやの　まどの　そとに　なたねが　はえて　おりました。
まだ　花は　さいて　おりません。けれど　つぼみが　たくさん　ついて　おりました。
もう　じき　はるが　くるのです。うまやの　まえの　ひざしが　ひに　ひに　あたたかく　なって　くろい　土から　白い　ゆげが　のぼりはじめて　います。
なたねの　つぼみたちは　かんばしい　においの　なかで　だんだん　ふくらんで　いきます。
「もう　じき、ね」と　一つの　つぼみが　ささやきます。
「ええ、もう　すぐ、おんもが　みられます」と　ほかの　つぼみが　こたえます。
つぼみたちは　まだ　この　せかいを　みた　ことが　ありません。この　せかいは　じびたと　そらの　二つに　わかれて　いて、その　あいだに、にんげんと　いう　りこうな　ものが　いきて　いると　いう　ことも、ことりと　いう　やさしい　いきものの　いると　いう　ことも、また　つぼみたちじしんが、花と　いう　うつくしい　ものに　なるのだと　いう　ことも　しって　いません。それで、
「おんもは　どんな　ところでしょう」
と　どの　つぼみも　おもって　いるので　ありました。
その　とき　むこうの　むぎばたけから　ことしに　なってから　はじめての　ひばりが　そらに　まいあがりました。そして　ひばりは　すがたが　みえなく　なるほど　たかく　のぼった　とき　うつくしい　こえで　うたいはじめました。
「ぴいちく　ぴいちく　ぴいちく　ぴいちく」
ひばりの　こえは　たかい　そらから　きんの　あめのように　ふって　きて、うまやの　そばの　なたねの　まわりに　ふりそそぎました。
「なんと　いう　きれいな　こえでしょう」
「あんなに　よい　こえで　うたう　ことの　できるのは　たれでしょう」
と　なたねの　つぼみたちは　うっとりして　ささやきあいました。
すると、つぼみたちの　あたまの　うえで　だれかが、
「ひばりです、よ」と　ふとい　こえで　いいました。
つぼみたちは　びっくりして、だまって　しまいました。やがて　おどろきが　とまると、
「いまの　ふとい　こえは　だれでしょう」

「きっと　おそろしい　ものに　ちがいないね」
と　ひそひそ　いいあいました。
すると　また　さっきの　ふとい　こえで、
「わたしは　うまです、ちっとも　おそろしい　ものじゃ　ありません」
と　いいました。しかし　つぼみたちは　うまが　どんな　ものでは　あるかも　しって　いません。
やわらかな　けむりのような　はるの　あめが　二三日　ふりつづきました。あめが　やむと　まえよりも　いっそう　あたたかな　ひの　ひかりが　そそぎました。
そこで　とうとう　いちばん　いただきに　いた　つぼみが　おめめを　ひらいて　花に　なりました。それから　つぎつぎに　つぼみたちは　上の　方から　下の　方へ　ひらいて　いきました。
「おお　まぶしい」
と　どの　つぼみも　はじめは　さけびました。それは　はじめて　みる　せかいが　いままでと　ちがって　ぴかぴか　ひかって　いたからで　あります。
やがて　つよい　ひかりに　なれて　くると　なたねの　花たちは　あたりを　みまわして、木や　はたけや　みちや　いえや　そらや　みずを　みました。それは　たいへん　うつくしく　みえたので　花たちは　このような　せかいに　うまれて　きた　ことを　よろこびあいました。それから　花たちは　じぶんたちの　すがたを　ながめあい、じぶんたちから　ながれでる　においを　かぎあって、じぶんたちが　みな　おなじように　きいろい　きものを　きて　おり、ほかの　木や　くさに　まけないほど　うつくしいのを　しって　いっそう　よろこびあいました。
その　とき　花たちの　あたまの　上で、
「おや　まあ　きれいに　さきましたね」
と　いう　こえが　しました。花たちは　きいた　ことの　ある　こえだと　おもって　みると、うまやの　まどに　大きな　やさしい　うまの　かおが　のぞいて　おりました。こんなに　やさしい　ものが　花たちの　おそろしく　おもった　うまだったのでした。
「おうまの　おばさん、この　せかいは　なんと　いう　うつくしい　よい　ところでしょう」
と　花の　ひとつが　いいました。
「ほんとうに　そうですよ、わたしも　はやく　ぼうやに　この　よい　せかいを　みせて　やりたくて　たまりません」

と　うまは　こたえました。
「おや、おばさん、あかんぼが　うまれるのですか」
「もう　うまれて　おります。でも　まだ　おめめを　とじて　ねねして　いるのですよ」
　花たちは　うまの　あかんぼを　みたいと　おもいました。けれど　あんなに　まどが　たかくて、どうして　なかを　のぞく　ことが　できましょう。
「おや　みなさん」
と　その　とき　うまの　おばさんが　いいました。
「まだ　ひらかない　つぼみが　あるじゃ　ありませんか」
　花たちは　びっくりして　みまわしました。
「どれ　どこに」
「そら、そら、そこに」
　なるほど、みると　なたねの　みきに　まだ　ひらかない　つぼみが　ひとつのこって　おりました。
「どう　したのでしょう」
「まだ　ねんねしてるのかしら」
「わたしたちが　もう　おめめを　ひらいた　ことを　しらないのかしら」
「もう　はるが　きてるのを　しらないのかしら」
　そこで　花たちは　まだ　ひらかない　つぼみを　おこしに　かかりました。
「まだ　ひらかない　つぼみさん　もう　はるですよ、おんもに　でて　いらっしゃい」
「まだ　ねんねしてる　つぼみさん　おめめを　さましなさい」
　すると　つぼみが　こたえました。
「わたしは　もう　めを　さまして　います」
「あら　あら、それでは　すぐ　でて　いらっしゃい」
　やがて　その　つぼみが　ふたつに　われて　なかから　なにか　でて　まいりました。ところが、花たちの　おどろいた　ことには　それは　花たちのように　きいろい　きものの　かわりに　まっしろい　きものを　きて　おりました。
「あら　どう　したのでしょう、あなたの　おべべは　まっしろよ」
と　おどろいた　花の　ひとつが　いいました。
　すると　その　とき　まどから　みて　いた　おうまの　おばさんが、
「ちょうちょうですよ」

と　花たちに　しらせました。
　それは　ほんとに　いっぴきの　ちょうちょうで　ありました。ちょうちょうは
花とは　ちがいます、おはねが　あって　あちら　こちら　とびまわる　ことが　で
きます。さて　この　ちょうちょうも　おはねが　じょうぶに　なると　かぜに　の
って　うまやの　やねを　こえたり、おがわの　うえに　いって　みたり　しました。
けれど　なたねの　つぼみと　いっしょに　そだった　ちょうちょうですから、なた
ねの　花たちとは　たいへん　なかよしでした。
「ちょうちょうさん」
と　とぶ　ことの　できない　花たちは　いうのでした。「おうまの　あかちゃんは
もう　おめめを　あいたか　みて　きて　ちょうだい」
　ちょうちょうは　すぐ　うまやの　まどから　なかに　はいって　いきました。
「おうまの　おばさん　こんにちは」
「おや　ちょうちょうさん　こんにちは」
「あかちゃんの　おめめは　あきましたか」
「けさ　やっと　あきました」
　みると　おうまの　あかんぼは　ねわらの　なかで　ぱっちり　おめめを　あけ
て　おとなしく　して　いました。

底本＊「新美南吉童話集　１　ごん狐」
著者＊新美南吉
出版社＊大日本図書
出版年＊１９８２年１月３１日初版第１刷発行
入力に使用＊１９９６年９月１日第１０刷発行
入力＊安城市中央図書館職員